



花すすき

招く袂は あまたあれど

秋はとまらぬものにぞありける

きよはらのもとすけ
清原元輔

「たくさんのススキの花穂が、私達を秋へと手招きしているけれど
秋は立ち止まることなく、足早に過ぎ去ってゆく。」

秋の移ろいは早く、刻一刻と景色が変わってゆきます。

ゆったりと手招きするように見えるススキの穂も、風と共に冬に吸い込まれていきます。
美しい秋、止まらぬ秋。無常で愛しい季節、そんな思いの伝わる歌です。

この歌の作者、清原元輔は『枕草子』を書いた清少納言の父上です。

歌を即興で詠むのが得意で、ユーモアのある人気者だったと言われています。
お祭で馬に乗って行進中に観客の前で落馬してしまい、冠が脱げてしまったのを
慌ててかぶらずに、つるつる頭に夕日を輝かせながら落馬についてスピーチをし、
皆を爆笑の渦に巻き込んだというエピソードが『今昔物語』に残っています。
清少納言のお父様、とてもお茶目な方だったんですね。

実は、ススキは植物としては「草原」から「林」への橋渡し役をしています。
荒地に小さな植物が生え、段々と大きな草が育ち、やがて木も生えるようになり
時間をかけて森になっていくことを「植生遷移」というのですが、
しっかりとした地下茎を持つ背の高いススキの群生は、草原としては最後の段階で、
放置すると木が生えて雑木林になってしまいます。

そのため昔から人々は、ススキ野原を維持するために「野焼き」をしました。
ススキは茅葺き屋根の材料になる重要な植物で、ススキ、アシ、チガヤなどを
総称して「茅」と呼びます。縄文時代や弥生時代にも屋根に使っていたようです。

ススキ野原は、美しい秋の景色であると共に、古の人々の知恵の結晶なのです。
風にそよぐ穂が金色に輝く時、秋もまた静かに深まってゆきます。

(新千載和歌集 巻第五 秋歌下、今昔物語集 巻第二十八 第六話) 花物語 比田井宗玉

